

ジェノザウラー オラトリオ
とある虐殺竜の生誕詩

-ジェノクラウエ誕生篇-

著者／流遠亜沙

原作／紙白

ASSAULT-SYSTEM 文庫

■ジェノザウラー改 機体解説

何体か製造された先行試作型ジェノザウラーを強化、改修した機体。本機は元々の状態でのゾイドコア出力がジェノブレイカークラスと高い出力を持っていたが OS（オーガノイド・システム）との親和性が極端に低かったために失敗作として破棄されていたが、ガイロス客分研究員のロゼット・コダールの手により大幅な改修を加えられている。

元々本機は OS との親和性が皆無といってもよいほど低いので OS を本機に合わせて調整し使用も必要最低限にとどめているため後に開発される完全野性体コアに非常に近い機体になっている。

そのほかには高いコア出力に見合うようにフレームの強化、内部機能の小型省エネ化、スラスターの強化など行っており、基本性能の強化に重点が置かれている。

特殊装備のセンサーホーンによる索敵範囲の拡大や急速旋回ブースターによる機動性・運動性の向上が見られる。
本機は改修を担当したロゼット・コダールの要望からある傭兵に渡される事となる……彼女の願いと共に。



型式番号：EZ-026C

用途：攻撃、対機甲、対ゾイド

全高：12.7m

全長：23.0m

重量：115.0 t

最高速度：290km/h

武装：AZ-30mm 頭部レーザーバルカン、ロングレンジパルスレーザーライフル、収束荷電粒子砲、ハイパーキラーファング、ハイパーキラークロー

特殊装備：センサーホーン（頭部）、急速旋回ブースター（脚部）

とある〈ジェノザウラー〉の話をしよう。

それは時代に求められて生まれたにも関わらず、望んだ者達の期待と違っていたために棄^すてられた。

出来損ない。

失敗作。

秘めた力を持ちながら、そんな評価しかされなかった。

それは一度もこの広い世界を知る事なく消えるはずだった。

それは一度も青い空を見る事なく居なくなるはずだった。

誰にも求められず、誰にも望まれず、誰とも判り合えずに終わるはずだった。

だがそれは、たったひとりの娘によって存在を許された。

そしてそれは、たったひとりの青年によって存在を望まれた。

これは——そんなとある〈虐^{ジェノザウラー}殺^{オラトリオ}竜〉の生誕詩である。

とある虐殺竜の生誕詩

ジエノザウラー

オラトリオ

ジエノクラウエ誕生篇

プロローグ

ZAC二一〇〇年^{ザク}一月。

ガイロス帝国軍のゾイド開発局は、既存のそれを圧倒的に上回るゾイドを開発した。

EZ・026〈ジェノザウラー〉である。

だが〈オーガノイド・システム〉の搭載を前提として開発された同機は、その強すぎるシステムにより制御が困難と判断され、後の量産型では、そのシステムを制限されて生産された。それは本来の〈ジェノザウラー〉とは別物とさえ呼ばれた。

本来の〈ジェノザウラー〉——いわゆる^{ファースト・ロット}初期生産型の生産台数は公式には残されていない。ナンバー01と呼ばれる機体はテストパイロットを務めたリッツ・ルンシュエッド中尉がそのまま愛機とし、ナンバー02はギンター・プロイツェンの特務兵士の元に送られ、どちらも絶大な戦果を挙げた。

だが、たった一機だけナンバーを与えられずに廃棄処分を命じられた〈ジェノザウラー〉がいた。

とある虐殺竜の生誕詩 - ジェノクラウエ誕生篇 -

ジェノザウラー オラトリオ

「——どうして、あの〈ジェノザウラー〉を廃棄処分になどするのですか!？」
怒髪天を衝く勢いで娘は怒鳴った。

ロゼット・コダール。

年齢は二十二歳。ガイロス帝国軍ゾイド開発局の客分研究員である。

腰まで届く長い金髪を揺らし、いつもは穏やかな青い瞳はつり上がっている。本来は温厚な印象が強い娘だけに、普段とのギャップに怒鳴られた男は委縮した。こちらは四十代くらいの少し気の弱そうな中年だ。彼が座っているデスクには『開発局長』とある。

「なぜ、あの子が廃棄処分なのかと訊いているんです!」

娘——ロゼットはもう一度男に問いかけた。

「……だから、あの機体は〈オーガノイド・システム〉との親和性が極めて低くてだね——」

「そんな事は判っています。なぜ、それが廃棄処分にする理由になるんです?」

男があまりに委縮しているため、ロゼットはいくらか冷静さを取り戻しつつ、静かに訊ねた。ひとつの事に気を取られると周りが見えなくなるのは自分の悪い処だ。そう言い聞かせて自分を落ち着かせる。

「軍が求めているのは〈オーガノイド・システム〉の実用化と、その広告塔だ。つまり、〈オーガノイド・システム〉を積んでいない〈ジェノザウラー〉は必要ないんだよ。すでに量産型の生産体制も進んでいる。〈魔装竜計画〉も動き出している。出来損ないを置いておく余裕はないんだよ」

「……………」

ロゼットは愕然とした。目の前の男は何も判っていない。目先の事にばかり気を取られて、その本質を見落としている事に気付いてもない。

だが男はロゼットの内心など判りはしない。彼女の無言を都合良く解釈し、

「そんなことより、君には〈魔装竜計画〉の特別顧問を務めて欲しいんだよ。聞けば、君は近々『Kamishiro』の名を継ぐそっじやないか。そんな君の推薦があれば——」

と、話題を転換した。恐らく男には廃棄処分の機体の事などすでに頭にならないのだろう。もう彼の言葉をロゼットは聞いていなかった。

「——だからだね。是非とも……」

「判りました、もう結構です。失礼します」

ロゼットはそう言う足早に局長室を後にした。



（局長は何も判っていない）

局長室を出たロゼットは真つ先にそう思った。

（〈オーガノイド・システム〉なんて不確かなものにすがって、技術者としてのプライドがないの？）

〈オーガノイド・システム〉。

それは、とある古代遺跡から発見された失われた技術だ。ロスト・テクノロジゾイドコアを活性化させ、ゾイドの能力を引き上げる事が出来る。だが『なぜ、そんな事が出来るのか？』——その本質の部分は未だに解明されていない。無論、ロゼットも技術そのものには興味がある。

だが——

（それに、あのシステム……嫌な感じがするんだよね）

上手く言葉では表現出来ないが、彼女の直感がそう囁く——あれは禁忌の力だと。知らずに使い続けられれば、いつかツケが回ってくる。そんな恐怖にも似た感覚がロゼットにはあった。

未知なるものに対する好奇心がなければ技術は発展しない。だが、闇雲に突き進むのは勇気ではなく蛮行だ。

進んだ先に何があるか？

理性を持つ人間であるなら、それを考えるべきだとロゼットは思う。

そんな事を考えているうちに、目的の場所に到着する。ゾイド開発局の最奥にある廃棄処分待ちのゾイドが置かれている場所だ。

滅多にヒトが来る場所ではない。いるのは件くだんの廃棄処分待ちの〈ジェノザウラー〉とロゼットだけだ。

「ねえ、あなたは廃棄処分だなんて嫌だよね？ せつかく生まれてきたのに、一度も広い世界に出られないんだよ？」

〈ジェノザウラー〉の巨体を見上げてロゼットは声をかけた。

「どうしてかな。私はあなたを放っておけない」

その声は優しく、思いやりに満ちている。心の底から目の前のゾイドを生かしてやりたいと願っている。

その時だ。

「……………え？」

〈ジェノザウラー〉と目が合った気がした。

そしてロゼットは様々なイメージを幻視した。中でも強く印象に残ったのは『巨大なツメ』のイメージだった。

ロゼットはその情報の奔流を一瞬で理解した——理解出来た。

〈ジェノザウラー〉の痛みも、想いも、願いも。

「……今の、ゾイドとの感応現象？」

廃棄処分待ちとはいえ、ゾイドコアは抜かれていない。だが、ゾイドコアは休眠状態のはずだ。起動させない限り、意識と呼べるものはないはずなのに……。

「……そう、判ったよ。あなたの本当の気持ち」

穏やかに微笑み、ロゼットは自室に戻るべく踵きびすを返した。



三日後。

ロゼット・コダールが発表したひとつの提案によって、ガイロス帝国軍ゾイド開発局は震撼しんかんした。

——〈虐殺爪竜構想〉ジェノクラウエ・プラン。

すでに提案がされていた〈魔装竜計画〉の一步も二歩も先を見据えたそのプランは、言わば机上の空論だった。戦争の勝敗を決めるのは兵器の数であって質ではない。

たかが一機の兵器が戦局を変え得るなど、絵空事フイクションでしかない。

しかし、それは技術者であれば一度は夢想するであろう最強の兵器を創造しようというものだった。

つまり、〈虐殺爪竜構想〉とは『最強のジェノザウラー』を開発するというものだった。

「詳細はご覧いただいた資料のとおりです」

会議室にいる全員が息を呑むなか、ロゼットは高らかに言った。ファンデーションで隠していたが、その目の下には隈くまが出来ていた。この三日間、彼女は寝る間を惜しんで〈虐殺爪竜構想〉を完成させた。所々に穴はあるかもしれないが、理論的には完璧なはずだ。

ロゼットには時間がなかった。今日、この会議で、あの〈ジェノザウラー〉の廃棄処分が正式に決定されるからだ。

（大丈夫。あなたは私が護まもるから）

ロゼットは内心で呟き、会議に参加している全員を見まわした。誰もが口を閉ざしている。判っているのだ、誰もがこのプランが魅力的だと。

だからと言って簡単に認める事も出来ない。理論的には完璧でも、実現させるのは極めて難しい。何より、先発の〈魔装竜計画〉はどうするのか？

それを察したロゼットは、

「〈魔装竜計画〉には私も参加します。〈虐殺爪竜構想〉はそれを踏まえた上での発案です」

と先手を制した。

ロゼットの言葉に、先日の局長を始めとした重役数名が安堵の表情を見せた。彼女なくして〈魔装竜計画〉は成り立たないからだ。

「お話は判りました。ですが、このプランを実行するには試験検証機テストベッドとなる〈ジェノザウラー〉が必要になります。現状でそれを調達するのは極めて難しいと言えます」

会議に参加している技術部の男がロゼットに対して言った。

ZACザック二二〇〇年二月。すでに各戦線に配備された初期生産型を呼び戻す事は不可能に近かった。その活躍は目覚ましく、どの部隊も手放す事はしないだろう。

余談だが、同年七月にリッツ・ルンシュテッド中尉のナンバー01機が〈ジェノブレイカー〉に換装されたのは、〈ブレードライガー〉という宿敵が現れたからだ。

「——試験実証機に関しては廃棄処分予定の機体を使用します」

ロゼットの発言に『そういう事か』という空気が流れた。彼女が件くだんの〈ジェノザウラー〉を巡って局長と衝突していたのは周知の事実だったからだ。

「……ロゼット君、あの機体は——」

「この条件を呑んでいただけなのなら、私は〈魔装竜計画〉を降りさせてもらいます」
渋い顔をする局長の言葉を最後まで聞かず、ロゼットはそう宣言した。

場が沈黙する。

誰もがロゼットを説得する言葉を探しながら見つけれられない。

そんな重たい空気の中——

「——ロゼット君といったか、噂は聞いているよ。何故、君はそこまで廃棄処分の機体なにゆえにこだわるのかね？」

低く、堂々とした男の声だ。ロゼットは声の主に顔を向けた。

がっしりとした長身の男だ。長い銀髪と、切れ長の赤い双眸そうぼう。年齢はよく判らないが、その身にまとう雰囲気は自信に満ち、他者を見下す様な傲慢ごうまんさが透けて見える。

ギョントナー・プロイツェン。

軍での階級は元帥。

ガイロス帝国摂政の肩書も持つ彼は開発局の人間ではない。視察と言う名目で開発局を訪れ、この会議に参加している。会議の空気が普段より緊張感に満ちているのは彼がいるからだ。彼の言葉ひとつで、この場にいる全員の首が飛びかねない。

「その〈ジェノザウラー〉、聞けば〈オーガノイド・システム〉との相性が悪いそうではないか。そんなものが、この^{ジェノクラウエ・プラン}〈虐殺爪竜構想〉に耐えられるのかね？」

「……はい」

ここが勝負所だ。プロイツェンの視線をまっすぐに受けつつ、ロゼットは答えた。

「確かに〈オーガノイド・システム〉との相性は最悪です。ですが、それだけです。あの〈ジェノザウラー〉は非常に強いコア出力を持っています。扱いにくい機体になるでしょう。ですが、最高の乗り手が見つかれば、最強の〈ジェノザウラー〉になる事を保証します」

「最強と言ったね。それは私の特務兵士のナンバー02以上と受け取ってよいのかな？」

「……はい」

場にこれまで以上の緊張感が走る。挑発したのはプロイツェンだが、ロゼットの発言は不敬罪に問われてもおかしくない。

しかし――

「ふ、ふふふふ――はっはっはっはっはっ！」

プロイツェンは笑っていた。

誰もが恐る恐るといった様子で彼を見つめた。

「ふふふ――いや、実に愉快だ。久々に笑わせてもらったよ」

プロイツェンは不敵な笑みを浮かべてロゼットを見た。

「よかろう――〈虐殺爪竜構想〉、私が許可しよう。例の〈ジェノザウラー〉も君の好きにするがいい」

「ほ、本当ですか！」

「ただし――」

とプロイツェンはロゼットの言葉を制した。

「^{ジェノブレイカー・プロジェクト}〈魔装竜計画〉も同時に進めてもらう。そして、^{ジェノブレイカー}〈魔装竜〉となったナンバー02と戦ってもらおう。そこで満足のいく結果が示せばよし。出来なかった場合は……

…判るね？」

恐らくロゼットの首が飛ぶ程度では済まないだろう。だが、彼女に他の選択肢はなかった。

「判りました。その提案、謹んでお受け致します」



『——それで？ 元帥閣下けんかに喧嘩けんかを売ったと』

あきれた様子の女性の声を聞きながら、ロゼットは受話器のコードを弄もてあそんだ。

「そういう言い方はやめてよ。それこそ、ガイロス軍にたった一人で喧嘩けんかを売ったあなたに言われたくないな——〈絶影ぜつえい〉さん？」

『……………』

「あ、怒った？ ごめんね、ファルナ」

『もう済んだ事だ。蒸し返すな』

ファルナと呼ばれた電話の相手が、少しだけ不機嫌な口調で答えた。

『そんな事より、要件は何？』

「それなんだけどね。ハンをちよつと貸して欲しいんだ」

『ハンを？』

「ええ。件くだんの〈ジェノザウラー〉のテストパイロットをしてほしいの」

『〈オーガノイド・システム〉と相性が悪いと言っていた機体のか？ 私がやっても構わ

ないが？ 興味もある』

「ファルナは駄目だよ。あの子は繊細デリケートなの。あなたじゃ相性が悪いよ」

『ロゼット、お前は私を暴君か何かと勘違いしていないか？』

ファルナの声に怒気が混じる。

「……………そんな事ないよ？」

『何だ、今の間は？ ——まあいい、こちらは一仕事お終えたところだ。アレでいいなら貸してやる。何なら、お前のものにしても構わんぞ？』

「もう、ファルナ……私とハンはそんな関係じゃないよ」

恐らく、にやりと笑みを浮かべているだろう友人の顔を想像し、ロゼットは頬ほおを膨らませる。

『冗談、でもないが。まあいい。ハンには私から伝えておく』

「うん、よろしく。じゃあね」

『ああ』

通話を終え、ロゼットは受話器を置いた。



二日後。

ガイロス帝国軍ゾイド開発局に一人の青年が到着した。

ハン・カミジヨウ。

年齢は十八歳。職業はゾイド乗り。そして傭兵——の見習い。

体格は中肉中背。黒い髪と茶色の瞳をした、そぼく素朴な雰囲気。

良く言えばおおらか、悪く言えば適当な性格で、ぼーっと空を眺めている事も多い。

しかし、戦闘となると優れた先読み能力と、卓越した技術で敵機を切り裂いていく。

日常と戦場で自分を切り替える事が出来る——そういう青年だ。

「……ここか」

長い廊下を進んだ先にあったドアには『第三格納庫・管制室』というプレートが貼ってある。

腕時計を見て時間を確認する。予定の時間まで、まだ十分ほど時間がある。

「少し早いが、まあいいか」

ハンはドアのタッチパネルに触れた。作動音と共にドアが横にスライドする。

入室すると、そこは文字通りの管制室だった。モニターやスイッチがいくつも備え付けられたコンピュータ一体型のデスクが何台も置かれている。奥に目を向ければ窓越しに格納庫が見下ろせる。

ハンは部屋を見まわして自分呼び出した人物を探す。

すると、左端のデスクにうつ伏せになっている人物がいた。長い金髪と細身のシルエツ

トで女性だと判る——ロゼットだ。

軽くため息を吐いて娘の正面にまわる。

「ロゼット、起きてくれ」

声をかける——が、ロゼットは目を覚まさない。

「ロゼット、起きろ」

娘の肩に手を置き、軽く揺する。と、ゆっくりとロゼットが身を起こした。

まだ寝ぼけているのだろう「うみゅ〜……」と、よく判らない声を漏らす。

ロゼット・コダール。

プロント

長い金髪と澄んだ碧眼が印象的な美人だ。年齢はハンより四つ上のためか、どこか彼に対して姉のような態度で接する。

メカニック

ガチガチの技術者だった祖父から色々な技術を教わり、オシロウ研究員とは名ばかりの凄腕の

技術者になったと、ハンはチームメイトであり、師でもあるファルナから聞いている。

そんなロゼットだが、今は髪の毛に寝癖がついているし、化粧もしていない——それでもどこか気品がある——その上シャツは乱れて胸元が露あらわになっており、ピンク色の下着がちらりと覗のぞいて——

「!？」

そこまで観察して、ハンは顔をロゼットからそむけた。これ以上、正視出来なかった。

ハン・カミジヨウ——彼が女性に対して免疫がつくのはもう少し先の話だ。

「? どうかしたの?」

「まぶた 瞼をこすりながら——まだ寝惚ぼろけているいるのだろう——無防備な姿をさらすロゼット。」

対して明後日あさっての方向を向いたままハンは、言い辛そうに、

「……シャツ、乱れてるぞ」

そう言われてロゼットは、ようやく自分の状態に気付いた。

「……きやつ!?! み、見ないで!」

「み、見てない!」

「見たでしょう!?!」

「……少しだけだ」

「見たんじゃない!」

大慌おどろてでシャツのボタンを閉じるロゼット。その顔は羞恥の色に染まっていた。



ロゼットは身だしなみを最低限だけ整えて、自販機で買ってきた飲み物をハンに手渡した。管制室なので、コーヒーマーカーたぐいの類は置いていない。

「……えつと、久しぶりだね。元気にしてた?」

気まずい沈黙を破つたのはロゼットだった。言葉通り久しぶりに会った青年は、以前より少し男らしくなったように感じる。

ハン・カミジヨウ。

先日、電話で話をした幼馴染おきななじみであるファルナの、いわゆる弟子に当たる。現在はまだ専用機を持っていないが、そのゾイド乗りとしての技術とセンスセンス感性は一級品と言える。彼の持ち味である実直でおおらかな性格なら、あの(ジェノザウラー)も気に入ってくれる。そう考えて彼を選んだ。

「まあ、なんだ……それなりに」

そう答えるハンは、しかしこちらを見ようとしない。まだ、先ほどの事を引きずっているのかもしれない。

（う……なんだろう。さっきの下着、変だったかな？）

そんな風に見当違いの思考をしてしまうロゼットも大概——天然である。

素朴そぼくで実直なハント、普段は穏やかで天然のロゼット。

ファルナ曰く——『お似合い』だそうだ。

それはともかく。

「ファルナから聞いているよね、ジェノザウラーあの子の事」

「資料は読んだよ」

ハンがようやくロゼットの方を向いた。そして、その顔はゾイド乗りのそれになんて変わった。こういうところが彼らしいとロゼットは好感を覚える。

「けど、ゾイドは実際に乗ってみるまで判らない」

ゾイドは金属生命体である。個体差もあれば、乗り手との相性も多分に性能に影響を与える。

「そうだね。けど、ハンなら大丈夫」

ロゼットは知っている。

「大事なのは相手を理解する事。あなたはそれを誰よりも知っている」

彼女のまっすぐな視線を受け、ハンはまた明後日の方向を見た。照れ隠しだろう。

「あの子は研究所ラボで生まれてすぐに廃棄処分のレッテルを貼られて、広い大地も青い空も知らない……」

だから——

「だから見せてあげて欲しいんだ——この世界を！」

ロゼットの言葉にハンは苦笑する。

「相変わらずだな。ゾイドに対して、技術者というより母親みたいな言い方だ」

「変、かな……？」

「いいや？ 俺は良いと思うぞ」

「そっか。やっぱり、ハンは良い子だね」

「……その弟みたいな扱いは、いい加減やめてくれ」

「ふふふ、ごめん。男の子だもんね」



生命が生まれて初めて目にするのは『光』だという。

それは誕生を祝福する煌めきだ。すべての命に平等に与えられる輝きだ。

だが『彼女』の世界は生まれてすぐに闇に閉ざされた。

誰からも必要とされず、誰からも愛されず、名前さえ与えられなかった。

『彼女』は絶望を知らない。希望を知らなければ、絶望という概念は認識出来ないからだ。

それが唯一、救いだっただけかもしれない。

だが――

『どうしてかな。私はあなたを放っておけない』

声が聴こえた。優しい女性の声だ。

『大丈夫。あなたは私が護るから』

音としてではなく、直接心に語りかけてくるような声。

『だから見せてあげて欲しいんだ――この世界を！』

誰だろうか？ どんなひとだろうか？

『名前をあげるよ。あなたにぴったりの、あなただけの名前を』

名前？ 私の名前は――

『――ジェノクラウエ』

その声は誕生を祝う生誕詩のようだった。
オラトリオ



コンタクト 接触は意外と簡単だった。 パーソナリティ 個性が強いゾイドほど、確立した自我を持っている。

そういう相手であれば意思の疎通も容易く出来る。
コミュニケーション

それがハンの持論だった。

師であるファルナは少し違う。相手の意思を尊重しながらも、自分を優位な立場に置く。

だから彼女が乗ったゾイドは従順になる。

だが、ハンの場合は少しずつ理解し合い、互いの納得出来る距離を決める。だからゾイドに振り回される事もある。ファルナに言わせれば甘いのだろうが、これが自分のやり方だ――これしか知らない。

「――私を呼んだのは貴方ですか？」
あなた

黒い闇の中、声をかけてきたのは——なんとというか、『男装の麗人』だった。

ダークスーツを身に纏っているが体格で判る——女性だ。身長は女性としてはやや高く、年齢は二十代半ばくらいだろう。胸元まで届く黒髪。前髪には白いメッシュが入っている。瞳の色は真紅で、どこか憂いを帯びた表情からは、悲しみに飽いて、あきらめる事を受け入れてしまったような雰囲気がある。

一見するとビジュアル系。パンクバンドでもやっていそうな容姿だが、生憎とハンにはそういった類の知人はいなかった。

これは仮想人格。対人インターフェイスだ。ゾイドがヒトとコミュニケーションを取る時に、稀にこういった趣向を凝らす個体がいる。今、ハン目の前にいる娘がそれだ。

ゾイドの記憶装置には大容量の『空き領域』と呼ばれるスペースがある。そこに形成される仮想空間では、ゾイドはヒトと同じ姿、同じ言語で、主と対話ができる。

ハン呼びかけに応えた〈ジェノザウラー〉が、ハンを——正確には彼の精神を仮想空間に招いた。

つまり、ハン前にいる娘は〈ジェノザウラー〉の化身だ。

「ああ。俺はハン・カミジョウ、お前と話をしに来た——〈ジェノクラウエ〉」

ハン返事に、娘はしばし沈黙した。

「……〈ジェノクラウエ〉というのは私の事ですか？」

娘が問ってくる。

その表情は派手目な容姿に反して、不安げな少女のように見える。

「ああ。ロゼットがそう名付けた。『巨大なツメ』という意味だそうだ」

「そうですか、ロゼットが私に……」

娘は薄く微笑むと両手を自分の胸に当てた。大切な何かをなくさないように。

そして、覚悟を決めたようにゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ロゼットにありがとうと伝えてください。最後に綺麗な名前を戴けました。私はもう何も思い残す事はありません」

「……本当にいいのか？」

「はい。私は自分の意思で決めたのです。〈オーガノイド・システム〉には屈しないと」

それが〈オーガノイド・システム〉との親和性が低い理由だとハンは悟った。

「なぜだ？ なぜ、そうまでしてあのシステムを拒む？」

「いずれ判ります。世界を破滅に導くもの……〈終焉の使者の断片〉」

「——ッ!？」

その瞬間、ハンが幻視したのは紅いジェノザウラー・タイプと蒼いライガー・タイプ、

それと戦うサソリ型のゾイドの光景だった。

(……何だ、今のは?)

それは恐れにも似た感覚だった。

それを知ってか知らずか、〈ジェノクラウエ〉の名を与えられた娘は言った。

「さあ、もう行ってください。これ以上貴方と話をしていると、私の決意は揺らいでしま
う。だから——」

言葉尻が切れる。その声はかすれていて、親とはぐれた迷子のように放っておけなかつた。

「だからって、お前を見棄^{みす}てて帰^{かえ}って言うのか? ふざけんな!」

娘は言葉を失った。怒鳴られたからではない。ハンが怒っている理由が判らなかつたからだ。

「この世界は不条理だ。平等でもないし、優しくもない。だからって、お前が犠牲になる必要がどこにある?」

「……………」

「開発局の人間がお前を不要だと言っても、ロゼットだけはお前の味方だった」

「——!」

そうだ、いつもロゼットだけは彼女の味方だった。

「ロゼットだけじゃない。俺もお前を助けたい。生きていれば、この先もっと多くのヒトがそう思ってくれるかもしれない」

娘は泣きたくなった。

「俺にはお前の気持ちは判らないかもしれない。けど、一緒に悩む事くらいは出来る」

彼の言葉がただ嬉しくて——

「だから、俺と一緒に来い。この世界は、お前を否定なんてしてない」

そこが限界だった。大粒の涙をこぼしながら、娘はハンの胸に顔を埋^{うず}めた。

少し戸惑ったが、ハンは娘を抱きしめる事にした。見ただけなら自分より年上の娘が、泣きじゃくる少女のようだったから。

ひとしきり泣くと、娘は一步ハンから離れ、彼に対して背中を向けた。

ハンは急がず、娘が口を開くのを待つ。

わずかな沈黙の後、娘が身体ごとこちらを向いた。そこにいたのは、先ほどまでの泣きじゃくる少女ではなかつた。

何かを決意するように間を置き、そして——

「私は生きていてもいいのでしょうか?」

「生きてちゃいけない命なんてない」

「私は存在を認めてもらえるでしょうか？」

「認めさせてやればいい。お前の存在を否定した奴ら全員にな」

「私は存在を許してもらえるでしょうか？」

「許すよ。少なくとも、俺とロゼットはな」

娘の問いに一つ一つ、正直に答えていく。

表情は変わらないが、少しずつ、娘の雰囲気が柔らかくなっている気がした。

「では、最後に問います——あなた貴方は私のマスターですか？」

真紅の瞳がこちらを見つめてくる。

「マスターなんて柄がらじゃない。俺の事はハンでいい」

少し照れくさかったが、そう言葉にする。

「では……そうですね、私の事はクラウとお呼びください」

娘——クラウも少しはにかんだような笑みを浮かべる。

「判った。これからが大変だが、よろしくな——クラウ」

「はい、マスター——いえ、ハン」



それからの四ヶ月間はあつという間だった。

ザク
ZAC二一〇〇年六月。

ジェノブレイカー・プロジェクト

〈魔装竜計画〉はその名を冠する新たな〈ジェノザウラー——〈ジェノブレイカー〉として結実した。真紅のカラーリングを身に纏い、その名の通り〈魔装竜〉となつた。

対する〈虐殺爪竜構想〉は第一段階である素体の大幅改修しか終了していなかった。

〈ジェノクラウエ〉とは追加兵装を装備した第二段階の呼称であり、現段階での〈ジェノクラウエ〉は便宜上〈ジェノザウラー改〉といったところだ。

「……ごめんね、ハン。デュアル・シールド・クローが間に合わなくて。せめてマグネツサー・ウイング・スラスタードけでも装備出来たら良かったんだけど……」

ロゼットが申し訳なきように言う。その表情は疲労の色が濃い。恐らくギリギリまで頑張ってくれたのだろうとハンは察した。

「センサー・ホーンと急速旋回ブースターがあるだけ良しとするさ」

〈ジェノザウラー改〉は高いコア出力に見合うようにフレームの強化、内部機能の小型化、

省エネルギー化、スラスターの強化などを行っており、基本性能の強化に重点が置かれている。現状でも瞬間的な加速性能だけなら〈ジェノブレイカー〉と対等だろう。

しかし、格闘戦になれば〈ジェノブレイカー〉のエクス・ブレイカーにリーチ差で劣る。ロゼットはそれを心配しているのだが、

「踏み込みの速さなら負けない。最初の一撃で決める」
ファースト・アタック

そう答えるハンの表情に悲壮感はない。

ならばロゼットは信じるだけだ。もうそれしか出来ないのなら、せめて笑顔で送り出そう。

「——ハン」

「何だ？」

「勝つてね」

「当然だ。ハン・カミジヨウ——〈ジェノザウラー改〉、出るぞ」



〈ジェノザウラー改〉が待機している第二格納とはちょうど反対側に位置する第六格納庫、そこに出撃を待つ〈ジェノブレイカー〉がいた。そのコクピットでコンバット・システムを立ち上げ、各種武装のチェックを行っているのは十四歳の少年だった。耳が隠れる程度に伸ばした髪は灰色に近い黒。冷たい瞳の色は紫。どこか他人を拒絶するような近寄りがない雰囲気の少年だ。

ギウンター・プロツェン直属の特務兵士。

名はレイヴン。

ファースト・ロット
初期生産型の〈ジェノザウラー〉を受領した一人である。

機体ナンバー02のそれは、真紅を纏った〈魔装竜〉として生まれ変わった。

宿敵——〈ブレードライガー〉を倒すために。

だがレイヴンの考えは少し違っていた。

（あんな奴に……あんなゾイドの性能に頼っているだけの奴に、二度も僕は負けた）

脳裏に浮かぶのは自分を負かした〈ブレードライガー〉のパイロットだ。

（けど、この〈ジェノブレイカー〉ならあいつに勝てる。待っている、バン。君を倒すのは僕なんだからな）

そうしてレイヴンは暗い笑みを浮かべ、

「シヤドオオオオオオオオ——ッ！」

と、もうひとりの相棒——レイヴンは否定するだろうが——を呼んだ。それは黒い獣脚類タイプのゾイドだった。全高は約二メートル。その外見は野生ゾイドに近い。それが背中から一対の羽根を生やし——飛んだ。そして《ジェノブレイカー》の真上に位置すると、一瞬でその姿を黒い光に変えて《ジェノブレイカー》と合体した。

シャドーと呼ばれたそれはシステムではなく、純正の《オーガノイド》だった。ガイロス帝国軍とヘリック共和国軍が血眼になって探し求めている《オーガノイド・システム》——その基となるもの。

だがそんな事はレイヴンにとつてはどうでもよかった。今は目の前の敵を倒すだけだ。

「レイヴン——《ジェノブレイカー》、出るよ」



ガイロス帝国軍ゾイド開発局・第二演習場。そこは広大な荒野だった。障害物はなし。足場に気を取られる心配もない。純粹な戦闘能力のみが試される、模擬戦には打ってつけだろう。

空を回遊するように飛んでいるのは追跡記録機の《レドラー》だ。

天気は快晴。蒼穹はどこまでも高く、果てしなく青い。

開始の鐘はすでに鳴っている。

戦況はレイヴンの《ジェノブレイカー》が圧倒していた。

伸縮式の支持腕^{アーム}を介して機体の両サイドに取り付けられた一対のフリー・ラウンド・シールド——そこに内蔵されているエクス・ブレイカー。それは巨大な『カニバサミ』だ。

自由度の高いアームによってフレキシブルに繰り出される攻撃は必殺の威力を持っている。払い、突き、時には振り下ろされるエクス・ブレイカーの変幻自在の猛攻を、漆黒の《エノザウラー改》はかわすので精一杯といった処^{ところ}だ。

誰もがレイヴンの勝利を信じて疑わなかっただろう。

だが、彼の性格をよく知るプロイツェンだけは少し違っていた。

《レイヴンめ、遊んでいるな》

彼のために特別に用意された応接室。同じく彼のために用意されたモニターで戦闘を観戦していたプロイツェンは内心で独りごちた。

《慢心はほころびを生むというのに》

プロイツェン直属の特務兵士レイヴン。彼には戦闘をゲーム感覚で楽しむ悪癖があった。

与えられた力に酔い、他者を蹂躪する事に喜びを見出す。弱者を蔑み、踏み潰す事に悦楽を感じる。

それは彼の心の拠り所でもあった。

そうする事でしか自分を維持出来ない。

弱い事は罪だ。

生きる事は戦いだから。

それしか今の自分にはないから。

プロイツェンがレイヴンを拾ったのは、あるいは自分と同じものを少年に感じたからかもしれない。

プロイツェンはただ黙って戦いの行方を見守った。



「どうした。君の力はそんなものかい？」

〈ジェノブレイカー〉のcockピットでレイヴンは冷笑していた。

戦況はレイヴンが圧倒している。目の前の漆黒の〈ジェノザウラー改〉は防戦一方だ。

「これが僕の本当の力だ。生まれ変わった〈ジェノブレイカー〉の真の力だ！」

何が〈虐殺爪竜構想〉だ。なぜ、プロイツェンはこんな失敗作を気にかける？

ひどく苛立つ。

自分以外のものに目を向けるプロイツェン。二度も敗北を味わわされた、バンという名のゾイド乗り。そして、しぶとく食らいついてくる目の前の敵の存在に。

「……失敗作が！ 僕の前から消えろ——ッ！」



「焦るなよ。まだまだ」

〈ジェノザウラー改〉のcockピットでバンは愛機をなだめていた。

とんでもないジャジャウマだ。好きにさせたら真っ先に格闘戦を仕掛けようとする。

「お前はもつと冷静な奴だと思っただがな」

人間の娘の姿をしたクラウの印象とは真逆だ。心を持っていても、そこはやはり戦闘機械獣——ゾイドという事だろう。

「切り札は一度しか使えない。だから一撃で決める」

戦闘が始まってからハンはまだ一度も攻勢に出ていない。とにかく機体の制御が難しいのだ。本来は背中に装備される予定のマグネッサー・ウイング・スラスターがないため、小回りが利かない。脚部の急速旋回ブースターで機体を無理矢理振り回している状態だ。互いに高速で移動しているため飛び道具は役に立たない。戦闘はすぐに格闘戦に移行した。そこからは〈ジェノザウラー改〉の防戦一方だ。〈ジェノブレイカー〉の繰り出す『カニバサミ』——エクス・ブレイカーに手数で攻められればハンは回避に専念するしかない。じりじりと押されていくのをハンは感じる。もう、何度〈ジェノブレイカー〉の攻撃をかわしたか覚えていない。

敵は強い。それは判りきっていた事だ。

ロゼットには強がつて見せたが、半分はハッターだ。

意地があるのだ——男には。

だが、勝つ心算もあった。

だから、あとは気持ちで負けない事だけだ。

「勝つぞ。なんとしても」



戦闘が開始されてから数分、優位に立ちながらも、先にしびれを切らしたのは〈ジェノブレイカー〉だった。

真紅の〈魔装竜〉が両サイドのエクス・ブレイカーを、翼を広げるように大きく左右に広げた。

挑発だ。『かかってこい』——と。

それに応じたのか、漆黒の〈ジェノザウラー改〉がまっすぐ突進した。

懐ふとこに飛び込んできた〈ジェノザウラー改〉に、〈ジェノブレイカー〉は右のエクス・ブレイカーを振り下ろす。

——勝った。

レイヴンはそう確信しただろう。

だが次の瞬間、密着状態にあつたはずの〈ジェノザウラー改〉がレイヴンの視界から——消えた。左脚部に装備された急速旋回ブースターを逆噴射し、一瞬で〈ジェノブレイカー〉の左側面に回り込んだのだ。

激しい加重Gに襲われながら、ハンの視界がぐると三百六十度回った。左脚部に続き、右脚部の急速旋回ブースターを噴かせ、空中で無理矢理一回転したのだ。〈ジェノザウラ

エピソード

『あれからもうすぐ三年か、早いものだ』

「そうだね。あの頃は無茶をしたなって今更ながら思うよ」

ロゼットは電話越しの相手に苦笑気味に言った。

〈ジェノクラウエ・プラン 虐殺爪竜構想〉を巡る一連の騒動——いわゆる〈ロゼット・コダール事変〉から約三年が経っていた。

「あの時はありがとう。ファルナの口添えがなかったら、あの子は今度こそ廃棄処分にされてたかもしれない」

電話の相手はファルナだ。ロゼットの幼馴染にして友人。そして、ハンのチームメイトにして師でもある女性。

『せっかくもらった『少佐』の肩書さだ。使わない手はない』

ファルナはそう言って笑った。

結論から言うと〈ジェノザウラー改〉はロゼットが個人的に引き取った。それが〈虐殺爪竜構想〉を公にしない事との取引だった。民間人が兵器である戦闘用ゾイドを所有するという前代未聞の取引だったが、それでもギンター・プロイツェンの名が幅を利かせた。

ロゼットは彼と何か関係があったのではないかと噂されたが、言葉に出来る者はいなかった。

『もしかしたら元帥閣下に気に入られていたのかもね。世が世なら皇帝摂政の妻だ』

「……そんなんじゃないと思うけど」

ザク ZAC二一〇一年十一月。プロイツェンは帝都ヴァルハラで反乱を起こし、死亡した。

彼が何を思って〈虐殺爪竜構想〉を支持したのかは、もう誰にも判らない。だが、彼の存在なくして〈虐殺爪竜構想〉はここまで来なかったかもしれない。

そして今日、その第二段階が完成する。

〈ジェノクラウエ ジェノザウラー改〉は構想の名を冠する〈ジェノクラウエ 虐殺爪竜〉として新生するのだ。

『長かったな』

「うん。事後処理は大変だったし、〈ジェノフレイカー・プロジェクト 魔装竜計画〉を見届けてからも色々あったから、長いって感覚はないんだけどね」

『お前もそういう歳になったって事だ』

「う……年齢の話はやめようよ、お互いのために」

しばし雑談に花を咲かせる。ファルナとは長い付き合いだ。気が置けない友人と話すの

は楽しい。

『じゃあ、そろそろ切るぞ。〈ジェノクラウエ〉の完成に立ち会えなくて残念だ。ハンにはよろしく言っておいて』

「うん、判った。じゃあね、ファルナ」

『ああ、またな』

ロゼットが受話器を置く。そして窓の外に目をやる。空は快晴だ。

それが、なんとなく嬉しくなる。

そこへ電話の呼び出し音が鳴る。内線だ。

「はい、ロゼットです」

『主任、〈ジェノクラウエ〉の最終チェックが終わりました。起動準備完了です』

「判りました。すぐに格納庫に向かいます」

相手の返事を待つて受話器を戻す。

主任——それが今のロゼットの肩書だ。

彼女は〈魔装竜計画〉の完了を見届けた後、自分の工場を開いた。

『L・C・ファクトリー』。

祖父の以前の代から引き継がれてきた隠し名であり、マイスターの称号でもある『Kamishiro』の名を継いだのだ。

ふと一息つくくと、自分の執務机デスクの上が散らかっている事に気付く。多くは業務上の書類や設計図たぐいの類だ。そこにある、まだ開発コードしか決まっていなはいゾイド達に想いを馳せる。

〈消えるモウキン〉。

〈怒れるオオカミ〉。

そして——

「——〈純粹なるもの〉……」

いつか形に見せる。

自分に言い聞かせるように、そう決意を新たにする。

「ロゼット、何してるんだ？」

そこへ、待ちかねたように現れたのはハンだった。彼はこの三年間、苦楽を共にした仲間だ。

「あ、ごめんね。すぐ行くよ」

「そうしてくれ」

そう言つてハンは睡まひを返す。その背中にロゼットは声をかけた。

「……………ありがとう——」

「何か言ったか？」

「ううん、何でもないよ」

「？ そうか」

どうして、そんな言葉が出たのか自分でも判らなかつた。

だが、言いたかつたのだ。

自分を取り巻く世界に。

共に在^あつてくれるヒト達に。

そして——

「^ハ生まれてきてくれてありがとう——^パジェノクラウエ」

FIN

あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『とある虐殺竜の生誕詩「ジエノクラウエ誕生篇」』をお届け致します。

この作品は二〇二一年に同人誌として販売した『とある虐殺竜の年代記』を改題し、加筆修正したものです。大きな変更はありませんが、ハンの口調を柔らかくしています。執筆当時は僕の中でのハンのイメージCVは小山力也さんでした。しかし、後に紙白さんからイメージCVは中村悠一さんだと聞き、ずっと書きなおす機会をうかがっていました。

あとは〈ジエノクラウエ〉(劇中ではまだ〈ジエノザウラー改〉にもなっていない状態ですが)の仮想人格・クラウのシーンを増やしています。

クラウ、好きなので。

ゾイドの擬人化に関しては好みの違いがあるかと思いますが、僕は大好きなので、こういう展開でなら受け入れてもらえるのではと思っています。

加筆修正したと言っても、すでに一度は世に出た作品なので、改めて内容について語るのはやめておきます。ただ、手前味噌を承知で言うなら、今でもお気に入り作品です。久しぶりに読み返してみても再認識しました。

そんな訳で、そろそろ謝辞を。

まずはこの作品を書くきっかけをくださり、監修をしてくださった紙白さんに感謝を。ありがとうございました。何度も言います——〈ジエノクラウエ〉を嫁にください。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございました。五周年企画はお楽しみただけですでしょうか？ まだまだ続きますので、お付き合いください。

感想を書く

あとがき

『5th anniversary of KAMISHIRO』ページに戻る